

## 入選

テーマ2：医療と福祉、わたしの体験  
「病棟への扉」

角川ドワンゴ学園S高等学校2年 鶴本航平

赤ん坊の頃から小児ぜんそくだった僕と2歳違いの妹にとつて、梅雨時は最悪だった。毎年、梅雨が始めると二人で代わる代わる夜間救急を訪れることになり、毎年一度はぜんそくや肺炎で入院する羽目になる。ぜんそくも苦しくて怖くて嫌だったが、入院はもつと嫌だった。

僕たちが通っていた病院の小児病棟の面会時間は夜9時までと決められており、見舞いに来る家族は9時までには病室を出ないといけないう決まりだった。病院の医師も看護師もみんな優しく、何年も通っているとだんだんと親しくなってくる。病院には僕たちが退屈しないように漫画やDVDがそろえてあり、明るいうちは多少退屈なのを除けば我慢できた。いけないのは暗くなってきたら。忙しい仕事の合間を縫って見舞いに来る母が帰る時間が近づいてくると、母を困らせるのが分かっていても自然と涙が浮かんできて「帰らないで」と母にすがりついた。何度も何度も「明日の朝は仕事に行く前にお母さんよりも早く来るから」という約束を母から取り付け、家から持つてきてもらったタオルに顔を埋めていたのを覚えている。

僕の入院中、母は妹を保育園に迎えに行った後、病院の売店で妹のためにパンやジュースを買ってから小児病棟へやって来る。12歳未満の子どもは面会禁止だったから、妹は病棟へ入れてもらえない。小児病棟への自動扉の前で母と別れ、母が自分のところへ戻ってくるのをソファに座って辛抱強く待つのだ。自動扉に誰かが近づいてくるたびに、母が出てくるのではないかと立ち上がって目を凝らし、その度にかっかりしてソファに戻る。小さな子どもを一人で待たせているのが心配で仕方ない母は、30分毎に妹の様子を見に行く。「もう帰れるの?」と妹に聞かれ「もうちょっと待っててね。お兄ちゃんが苦しい苦しいってなっ

るから、一人じゃかわいそうでしょ」と言い聞かされ、「分かった」と聞き分けよく座り込む。病室にいた僕がその光景を見ることはなかったが、妹が入院しているときは僕も同じように病棟の扉の前で母をひたすら待っていたから、どんな会話がされていたかも、母の表情も痛いほど想像がつくのだ。

病棟の扉の前のソファは3人掛けで、他の子どもや家族が座っていることもあった。けれど、夜になってくるとぼつんと一人ぼっちになることもよくあった。そのガラス扉の向こうには忙しく働く看護師さんの姿が見え、扉を開ければどこかの病室に母や妹がいることは分かっていたが、その扉を越えていくことはできないのだった。

中学生になり体が成長した僕たちは、ぜんそくで入院することはすっかりなくなつた。しかし、子どもころの思い出と聞かれるといまだに真つ先に思い出すのは、夜の病室の壁にうつる影が怖かったことと、妙に明るい自動扉の向こうの病棟の明かりだ。仕事のせいで夕方遅くにしか見舞いに来れず、来たら来たで幼い子どもを病棟の扉の前で待たせなくてはならない母の不安や罪悪感も、今ならよく分かる。二分の一人成式の母への感謝状に「ぜんそくのときに、ずっと面倒を見てくれてありがとう」。お金がかかるときに薬代やタクシー代を払ってくれてありがとう」と書いたとき、母は声を上げて泣いた。

今日もどこかの病棟で母の見舞いを待っている子がいるのだろうか。一人で兄弟の見舞いにいった母を待っている子もいるのだろうか。もつと病気になった子どもも家族にも優しい社会になってほしい。働く母親たちが遠慮せず子どもも見舞いに行くことができ、一人で母親を待つ子どものいない社会が実現できたらどんなに良いか。子どもにも家族にも優しい、そんな世の中に変えるために、僕は尽力したいと思っ